【学年】　４年	【教科・単元など】道徳「二わのことり」２−（３）友情信頼

【本時のねらい】

・３わの鳥たちの関係性を考えることによって友だちの質の違いについて考え、友情とは何かを考えようとする態度を養う。

【題材と指導について】

・出典は、いくつかの１年生の道徳副読本に掲載されている「二わのことり」である。結末は、各社多少異なる。

・本実践は、小教研道徳部で講師から紹介された筑波大学付属小学校　加藤宣行先生の実践を元にしている。

・「安全運転型＝場面発問（例：ーはどんな気持ちでしょう）」という、国語の読み取りにもなり得ない可能性のある展開が、現在多く行われている。それだけではなく、「冒険運転型＝テーマ発問」によって、子ども自身の問いから「道徳的に考える問い」から「人間的に考える問い」をすることによって、テーマに対する本質を子どもたちが考えるようになる。

【実践の概要と子どもの様子】

主な発問は次の通り。

①「この中から友だちを探しましょう」
「うぐいすとみそさざい、やまがらとみそさざい、両方友だち。でも、違いはないかな」

②「みなさんは、だれと友だちになりたいですか。」

③「みそさざいは、本当はうぐいすのところがよかっただろう。しかたなくやまがらの家に行ったのではないかな」（「人間的な問い」へ）

知的好奇心について

この学習で知的好奇心として考えている部分は、「人間的な問い」にあたるところである。いわゆる道徳的な判断ではなく、自分自身への生き方の問いとなるからである。この時期の子どもたちは、道徳的な善悪の判断はできる段階にあるが、世界は道徳的な善悪の判断だけでは成り立っていないことを自覚している子は少ない。そのため、この題材で、損得や善悪全てを一旦受け止めて、自分の納得する判断を見つけるために考えるのが今回の問いである。これまで深く考えてこなかった「自分自身へ問う」必然性のある「問い」との出合いを、知的好奇心としたい。

【子どもの様子・反省】

発問①②では、やはり模範回答のような発言が相次いだ。本学級の子どもの実態から考えると、予想通りである。特に、②における「やまがらと友だちになりたい」と考えた子どもの理由は、「かわいそうだから」というものである。普段から、お互いを傷つけないような方法を考えて行動しようとする本学級の子どもたちの姿そのものである。③の「しかたなく」の部分について考える時が、子ども自身が問い、自ら答えを出す場面になるはずだったが、教師が「いやいや」という言葉を使ってしまったため、道徳的な判断をしようとする子どもの発言が増えてしまった。もし、「しかたなく」の部分にきちんと焦点が当たっていれば、子どもたちは、もっと、人間的な問いとして受け止め、自分自身の経験と重ねて考えることができただろう。ただし、子どもたちは、この問いに非常に真剣に向き合い考えていた。

テーマ発問は、実体のない「道徳的なもの」の本質に迫るために有効であるし、子ども自身が主体的な判断をする機会となる。今回だけでなく、積み重ねていくことによって、様々な場面で本質を考えようとする子どもが育つことも期待できる。また、「二わのことり」は、低学年向けの題材ではあるが、むしろ高学年にこそふさわしいものであると思った。簡単な話を扱うことによって内容理解が容易になり、誰もが「人間的な問い」について深く考えることができるからのである。